

『リットン調査団 満鉄特製アルバム』について

村田雄二郎

はじめに

ここに紹介するのは、東洋文庫が古書店を通じて二〇二二年度に購入した写真アルバム、*League of Nations Commission of Inquiry in Manchuria Album, South Manchuria Railway, May 1932* である。サイズは縦41 cm、横30 cm。周知のようには、一九三二年九月に発生した満洲事変を承けて、国際連盟は一二月の理事会で満洲調査委員会（リットン調査団）の派遣を決定した。本アルバムはその内容から見て、南満洲鉄道株式会社（満鉄）がリットン調査団を現地に迎え、満洲国（一九三二年三月一日成立）や関東軍と連携して、日本の満洲占領と建国の正当性を国際連盟に訴える目的で作成・贈呈されたものと思われる。扉には“With the Compliments of Count Yasuya Uchida, President, South Manchuria Railway Company [満鉄総裁 伯爵内田康哉 謹呈]”の辞が添えられている。

本アルバムは、リットン調査団の正規メンバー（五名）に向けて特製されたもので、至るところ英語の説明が付されていることから、日本向けではなく、報告書を執筆する委員のために、極めて限定された部数が作成されたと思し



図1 一九三二年四月四日、漢口に到着したリットン調査団一行（前列左はリットン、右は顧維鈞⁽³⁾）

い。満鉄本社に控えを置き、あるいは内地の宮中、外務省など政府機関にも贈られた可能性は否定できないが、いまその所蔵を日本国内の図書館や資料館で確認できない。国外では、国際連盟本部に贈られた一冊が、ジュネーブ国際連合図書・文書館（The UN Library & Archives Geneva）に遺⁽¹⁾されて⁽¹⁾いる。

ちなみに、同館は国際連盟文書をデジタル化してウェブで公開しつつあり、中にはリットン調査団に関する資料も大量に含まれる。中国では、南京大学歴史学院の張生教授を中心に、同館所蔵のリットン調査団関係文書を収集・整理し、中国語に訳して出版する大型プロジェクトが進行中であり、一部はすでに公刊⁽²⁾されている。

さて、アルバムのタイトルを直訳すれば『国際連盟満洲調査委員会アルバム』となるが、本稿では内容を加味して『リットン調査団 満鉄特製アルバム』（以下、「特製アルバム」と称する）とした。

特製アルバムは大きく二部からなる。

前半の五〇頁は、リットン調査団一行の満洲各地での行動を撮影した写真である。最初の判一枚が脱落しているほかは、計九四葉の写真が四隅のコーナーシールに丁寧に収められる。保存状態は概して良好である。すべての写真に英文のキャプションが付され、間に大連・旅順などの地図、列車運行スケジュール等が挟まれるほか、昼食会やデイナーのメニュー、ワインリストなどもあり、満鉄が関東軍や満洲国と連携して一行を「歓待」した様子がじかに伝わってくる。さらに、和装の女性によるもてなしの場面も数葉見られる。これらの写真を調査団の行程と照合してみると、日付と場所の同定が可能であり、ほぼ時間軸に沿って配列されていることがわかる。

後半部分は新聞の切り抜き四〇頁である。後述するように、英文・日文・中文・露文の新聞から調査団一行に関する報道をスクラップしたものであるが、中に漢文で書かれた農民からの請願書があり、注目される。前半の写真部分にも、一行が宿泊するホテルに請願のため訪れる朝鮮人農民、朝鮮人居住区を訪れる調査団の姿などが見られ、満鉄が何を見せようとしたのか、どのような意図をもってこの特製アルバムを作成したのか、その一端がうかがわれる。

一、リットン調査団と顧維鈞入満問題

一九三一年二月一〇日、国際連盟本部で満洲問題に関する連盟調査団の派遣が可決され、翌年一月までに以下の五名の委員が指名された。

イギリス：リットン (Victor Alexander George Robert Bulwer-Lytton, 委員長)

フランス：クローデル (Henri-Edouard Claudel)

イタリア：アルドロバンディ (Luigi Aldrovandi-Marescotti)

ドイツ：シェネー (Albert Heinrich von Schnee)

アメリカ：マッコイ (Frank Ross McCoy)

このほか、調査団には随員五名、専門家（法律・鉄道・経済）に加えて、当事国の日本と中国から一名ずつ参与員 (Assessor) を出すことになった。日本からはトルコ大使吉田伊三郎が、中国からは屈指の知米派で国民政府外交部長の経験のある顧維鈞 (Wellington Koo) が指名された。

一行はアメリカ経由で半年に及ぶ長期間の調査の旅に赴く。まず一九三二年二月末に横浜に到着し、東京、大阪、神戸で政府・軍・実業界各方面との会談や聞き取りなどを行った後、中国に向かい、三月一四日に上海に上陸した。三月二六日には首都南京に到着、当地では汪精衛行政院長、蒋介石軍事委員会委員長ら国民政府首脳と会談を重ね、意見交換を行った。その後、一行は四月に北京に赴き、奉天から逃れてきた張学良とも面会し事情聴取を行った。この際、張学良が調査団に対して満洲における日本の行動を非難し、中国の領土保全を訴えたことは言うまでもない。北京での会談と調査を終えた一行は、四月一九日に北京を発って、陸路と海路に分かれて大連に向かう。調査団の

本来の目的地、満洲を訪問するためである。このとき大きな懸案となったのが、顧維鈞の満洲入りの可否だった。というのも、満洲国政府（調査団が日本滞在中の二月二八日に満洲建国が宣言された）が中国側参与員顧維鈞の満洲入りに、強硬に反対していたからである。反対論を主導したのは、満洲国外交部総務司長の大橋忠一である。もし顧維鈞が満洲に入れば、張学良ら敵対勢力を勢いづかせ、新政府に不利に働きかねないというのがその理由であり、関東軍の本庄繁司令官もこれを支持していた。

事の経緯は、白井勝美が日本の外交文書などから明らかにしているが、満洲国が閣議決定で、顧維鈞とその随員の満洲入りを拒絶することを南京国民政府に通知するのが、リットン調査団が北京に滞在していた四月五日である。⁽⁴⁾日本政府はこの決定に関与していなかった。これより前、懸案が起こると、日本政府は国際聯盟本部と満洲国の居中調停を試みていたが、満洲国側の姿勢はあくまで強硬であった。他方、リットンも顧維鈞の同行が認められなければ調査団は満洲には入らないとの警告を満洲国と日本政府に発していた。

調査団が二手に分かれて移動したのは、右のような事情があつたからである。満洲国は日本政府の説得もあつて、しぶしぶ顧維鈞の入満を認めたものの、鉄道での移動には最後まで強硬に反対した。満洲国の立場からすれば、京奉線（北平―奉天）のうち「関外」（山海関―奉天）の部分は「満洲国有鉄道」であり、その運営を満鉄に委託した路線であった。幾度もの交渉と協議の結果、調査団のメンバーのうち、アルドロバンディとマッコイは列車で奉天に向かい、リットンら三名の委員と顧維鈞は満洲国境手前の秦皇島で汽車を降り、リットンと顧は中国軍艦で、またクロードルとシェネーは日本の軍艦に乗り、海路大連に向かうことになった。



図2 一九三二年四月二日、中国の軍艦で大連に到着したリットン（前列右）と顧維鈞（前列中央）

特製アルバムには、大連に到着したばかりのリットンと顧維鈞を船上で撮影した写真が収められている（図2）。

顧維鈞一行の満洲入境にあたり、満洲国は国際連盟に対しその安全の確保や便宜供与を約束した。しかし、「妨害等ヲ加フルコトナク単ニ監視的態度ヲ以テ其行動ヲ静観スル」⁽⁵⁾との日本政府の意向にもかかわらず、現地当局は顧らの一挙手一投足に注意を怠らず、外出はもとより、彼の行動に厳しい制限を加えようとした。顧維鈞も調査終了後に政府に提出した報告書の中で、満洲での中国代表団は、行動の制限、人数の制限（二一名から一四名に減員）、監視や取締り、調査団との隔離、など諸々の妨害や嫌がらせを受けたと述べている。⁽⁶⁾ 奉天のヤマトホテル滞在中には、過剰なる「監視」に対して外交ルートで抗議の意を伝えることもあったようである。⁽⁷⁾

そうした事情からか、特製アルバムには、上記の大連到着時の一枚のほか顧維鈞が登場する写真はまったくない。そうした事情からか、特製アルバムには、上記の大連到着時の一枚のほか顧維鈞が登場する写真はまったくない。他方、日本の参与員たる吉田伊三郎は、しばしば特製アルバムにその姿を確認できる。満鉄の側が満洲国の意に沿って、顧の存在を意図的に消去あるいは無視しようとしたことは明らかである。

以上のような経緯から、顧維鈞ら中国代表団はリットンら調査委員一行とともに大連→奉天→長春→ハルビンと移動したものの、滞在地では多くの場合、別行動をとらざるを得なかった。それもあって、満洲国内での活動の実態は不明なところが多い。顧維鈞の回想録では、大連到着後に溥儀夫人婉容の密使から長春脱出のための協力を懇請され

たこと、長春では本庄繁に再三請われて、ある日の晩に日本料理屋で密かに食事をともにしたことなど、いくつかの興味深いエピソードが語られるが、これを裏付ける証拠は見当たらない。⁽⁸⁾ 本庄繁の日記にも、リットン一行の調査に応じた日の夜「リットン卿等の満洲国との連絡の事及中央部の意図を奉じ、顧維鈞の調査を許す事に付ての研究会議」⁽⁹⁾を開いたと記されるものの、顧と接触した旨の記述はいっさいない。特製アルバム写真からほぼ「抹消」された顧維鈞一行の具体的行動については、コロンビア大学顧維鈞アーカイブやジュネーブに蔵される国際連盟資料に基づき、今後解明されるべき課題であろう。

二、調査団の活動と特製アルバムの写真

リットン調査団の満洲における行程は、委員や随員によって違いはあるが、概ね以下の通りである。^{*}で示したのは、特製アルバムの写真で確認できる宿泊先と訪問先（訪問者）である。

【四月二〇日】 大連着

【四月二二日】 大連発、奉天着（*ヤマトホテル泊）

【四月二二日～五月一日】 奉天

*奉天総領事館／北陵／関東軍司令部／東陵

【五月二日】奉天発、公主嶺を経て長春着

* 公主嶺農業試験所

【五月三日～六日】長春（*ヤマトホテル泊）

* 満洲国外務総長謝介石／満洲国総理鄭孝胥／日本領事館／満洲国執政溥儀

【五月七日】日帰りで吉林に

* 日本総領事石射猪太郎／第二師団長多門二郎／吉林省長（招宴）

【五月八日】長春

【五月九日】長春発、ハルビン着（*ホテル・モデルネ泊）

* 中東鐵路蔡家溝駅

【五月一〇日～二〇日】ハルビン

* ハルビン関東軍司令部／ハルビン市長鮑觀澄／日本総領事館／ポーランド教会／中東鐵路理事長〔代

理〕李紹庚／朝鮮人居住区／黒龍江省長程志遠

【五月二一日】ハルビン発、奉天着

随員数名は二二日に空路にてハルビン発、チチハル着（*龍江ホテル）*チチハル日本領事館／江橋／

洮南

【五月二二日～二四日】奉天

【五月二五日】奉天発

【五月二六日】大連着

*満鉄総裁内田康哉公邸

【五月二七日】日帰りで旅順に

*二〇三高地

【五月二八日～二九日】大連（*ヤマトホテル泊）

*関東州長官山岡万之助／満鉄総裁内田康哉

【五月三〇日】大連発、鞍山を経て奉天着

*鞍山製鉄所

【五月三一日】奉天

【六月一日】日帰りで撫順に

*昭和製鋼所社長兼満鉄理事伍堂卓雄公邸／撫順シエールオイル工場／撫順炭鉱

【六月二日～三日】奉天

*柳条溝^マ爆発地点／北大営

【六月四日】奉天発、錦州を経て山海関着

*錦州警備隊司令部

満洲におけるリットン調査団の活動でもっとよく知られるのは、柳条湖爆破地点を調査する一行の写真であろう。この調査が、一か月半に及ぶ満洲滞在の最後の日（六月三日）に行われたことには意外の感を覚える。関東軍の意図が働いていたのか、あるいは別の事情があったのか、今後の解明を俟ちたい。

別に目を引くのは、一行のハルビン滞在が異例の長さに及んだことである。背景には、国民政府下の黒龍江省主席代理であった馬占山がいったんは満洲国に合流する態度を見せたものの、リットン調査団の入満を前に離反し、関東軍との戦闘が続く中で、調査団が馬との面会を強く希望していたことがあった。顧維鈞もこうした情勢を踏まえて、満洲国に敵対する馬占山との会談の必要性を強く主張した。結局、調査団の意を体したスイス人ジャーナリスト、リント（A. R. Lindt）が「密使」となって馬との会見に成功したが、これを知った満洲国・関東軍が強く反発したのはもちろんである。⁽¹⁰⁾ 特製アルバムの写真からは、馬占山問題をめぐり緊迫するハルビンの情勢はいつさい伝わってこない。

対照的に、調査団一行の活動は、満洲国と関東軍の入念な準備と警備の下、整然と計画どおりに進められた。特製アルバムの写真には、ホスト役の満洲国高官、関東軍将校、満鉄関係者、日本の領事らと会見した調査団一行を撮影したものが多い。写真に現れる重要人物としては、満洲国執政溥儀（図3）、國務院総理鄭孝胥、外交部総長謝介石、財務部総長熙洽、関東軍司令官本庄繁、満洲国軍政部最高顧問多田駿、満鉄総裁内田康哉などがある。

顧維鈞のみならず、調査団一行に対する警備が嚴重であったことは、調査委員の一人、ドイツ人のハインリッヒ・



図3 一九三二年五月四日、満洲国執政溥儀に謁見するリットン調査団一行

シユネーがこう語っている。

奉天市内でもわれわれが襲撃されるのを防ぐため大勢の警官が配置された。調査団員はだれでも外出の際、つねに私服の憲兵一人に伴われることは、すでに東京訪問以来の経験であった。しかし奉天ではホテルからちよつと外に出たときでも警官が寄り添うようについてきた。われわれが日本側の軍人や文官の役所あるいは自国の領事館に会談のため出かける時、道路上にはたしかに以前の軍服を着用しているものの帽子に新政権「満洲国」のしるしの星かざりをつけた警官隊が配備されていた。はじめのうちは満鉄付属地の境界線でわれわれの車はかならず「満洲国」の警官に停止を命ぜられた。これは明らかに、われわれの中国側の参与員顧（維鈞）博士が同乗していないかどうかを調べ、もしいた場合には彼を逮

捕するためであった。⁽¹¹⁾

やはり顧維鈞の動向に当局が厳しい監視の目を巡らせていたことがわかる。政府・軍を挙げての歓待と嚴重なる警備・監視の二面こそ、特製アルバムの写真が照らし出す、満洲国の表と裏の「光景」そのものである。

三、請願団と陳情書

次に、新聞切り抜きに目を移してみよう。まず注目されるのは、切り抜きの間に貼り付けられた、冊子体の「陳情書」である(図4)。毛筆で綴られ、末尾に「奉天省懷徳県農民代表 畢樹勲／趙祉軒／王迪禹／韓煥然」の署名がある。印刷されたパンフレットになっているので、あるいは満洲国関係者が関与して作成したものかもしれない。内容は、張作霖・張学良父子統治時代の農民に対する苛斂誅求や匪賊跋扈による生活の困窮を縷縷述べ、新国家誕生を歓迎しつつ生活改善への期待を訴えるもので、当局が裏で組織したであろう「ヤラセ」感が甚だ濃厚な文書である。

この「陳情書」は、すぐ上に貼りつけられた『満洲日報』の記事「懷徳県農会から調査団へ陳情書 過去の県状を縷述」により、五月二日に奉天から長春へ移動する途上の公主嶺で手渡されたことがわかる。おそらく農業試験場を査察した際にやり取りされたのである。記事は陳情書の全文を翻訳紹介している。

ちなみに、リットン調査団が中国や満洲各地に滞在している間、多くの住民や団体から連盟・委員宛に手紙・電報・

陳情書・宣言書・報告書など実にさまざまな文書が寄せられた。リットン報告書によれば、満洲滞在中に「農民、小商人、都市労働者及学生ヨリ發セラレタル」書簡は一五〇〇通に上ったという。これらの書簡は「二通ヲ除キ他ハ総テ新「満洲国政府」及日本人ニ対シ痛烈ニ敵意ヲ示」すものだったという⁽¹²⁾。また、数字にズレはあるが、張生の統計によれば、満洲の住民が提出した各種文書（呈文）のうち、満洲独立を非難する書簡は一三九〇通、満洲国を支持するものが二〇余通であった⁽¹³⁾。特製アルバムの「陳情書」は、新政府を支持するわずか二通の文書の一つだったのかも
しない。

書簡や陳情書ばかりではない。調査団は訪問した先で民衆団体の代表とも進んで面会した。リットン報告書や日本の外交文書などから知りうる限りでも、調査団（事務局員も含む）が民衆団体や民族団体・宗教団体の代表から直接意見を聴取する場が設けられた⁽¹⁴⁾。（表1、*は日本の外交文書にも記載あり。）

このうち、特製アルバムの写真で確認できるのは、四月二十六日、五月四日、五月一日、六月一日の会見である（図5）。民衆団体との会見がどのように準備されたのかは判然としないが、いずれも満洲国政府や関東軍の許可を経て設けられた会見であったことは想像に難くない。このほか、五月七日に吉林を訪れた際の写真には、朝鮮人の父親に抱き抱えら



図4 奉天省懷遠縣農會「陳情書」

日時	場所	面会者
四月二四日	奉天	*朝鮮人代表約五〇名
四月二六日	奉天	*鉄嶺・長春・安東・奉天居留の朝鮮人代表
五月四日	長春	朝鮮人農民、「満洲国」人民代表、蒙古代表
五月六日	長春	蒙古・回教徒使節
五月七日	吉林	*朝鮮人代表、日本人代表
五月一〇日	ハルビン	*三〇名の朝鮮人避難民
五月二七日	大連	朝鮮人代表
六月一日	奉天	朝鮮人代表、満洲人代表
六月一日	撫順	朝鮮人農民

表1 リットン調査団との面会者



図5 上は四月二六日、奉天で調査団との会見を終えた朝鮮住民。下は五月一日、街路で請願を行う満洲の農民。

れる幼児と調査団員のスナップもあり、キャプションには「張学良の支配下で吉林省の兵士により中指を切断された朝鮮人の幼子」との説明がされている。「陳情書」と同じく、張学良政権の横暴・非道を調査委員に印象付けようとの意図が一目瞭然である。

紙名	言語	発行地
<i>Manchuria Daily News</i>	英	大連
満洲日報	日	大連
<i>Osaka Mainichi</i>	英	大阪
奉天毎日新聞	日	奉天
盛京時報	中	奉天
大阪朝日新聞	日	大阪
<i>Japan Times</i>	英	東京
<i>Harbin Daily News</i>	英	ハルビン
哈爾濱公報	中	ハルビン
<i>Харбиноское Время</i> (ハルビンスコエ・ブレーミヤ)	露	ハルビン
黒龍江民報	中	チチハル

表2 新聞切り抜き一覧

四、新聞切り抜き

最後に特製アルバムの後半を占める新聞切り抜きについて、簡単に紹介しておこう。四〇頁に及ぶ切り抜きは、満鉄が経営する新聞のほか、満洲国・関東軍の息のかかった新聞が多く、満洲独立に批判的な論調の記事は一つもない。満洲国寄りの色彩が濃厚な記事ばかりである。新聞リストと発行地を掲げると、表2のようになる。

このうち *Manchuria Daily News*、『満洲日報』、『盛京時報』の三紙はこのとき満鉄経営の新聞になっており、『黒龍江民報』は満洲建国後に関東軍に接収された。『哈爾濱公報』も満洲国擁護の立場に転じたため、関東軍から再発行の許可を受けていた。⁽¹⁵⁾ いずれ



図6 左は四月二二日、奉天ヤマトホテルで日本人記者の質問に答える顧維鈞（『盛京日報』四月二六日）。右は五月七日、日本の憲兵に護衛され吉林を訪れる顧維鈞（*Osaka Mainichi*、日付不明）。

も日本の領事館や関東軍の監視下に置かれた日刊紙である。『ハルピンスコエ・ブレーミヤ』は切り抜きの中で唯一のロシア語新聞であり、満洲国や関東軍と直接の関係はなかった。このときハルピンはまだ満鉄の管轄圏外にあり、しかも馬占山の反乱で先行き不透明な政情にあった。ハルピン言論界への日本の影響力はかなり限定的であったと言わざるを得ない。とはいうものの、満洲建国後には、ハルピンでも言論統制と世論操作を目的に、日本の領事館がロシア語刊行物にも検閲の目を光らせるようになった。⁽¹⁶⁾

新聞切り抜きで注目すべきは、写真の部分ではその存在がほぼ「抹殺」されていた顧維鈞の動向が、大きく取り扱われていることである（図6）。これらの記事を見る限り、顧維鈞はときに日本側（満洲国や満鉄）と調査団の会見の場に同席し、また調査団一行と外出をともししている。さらに満鉄総裁内田康哉の招宴にも賓客として出席し、日本人記者に取り囲まれて取材を受ける場面も報道されている。記事の多くは写真付きで、関連報道の多さは、写真部分の「抹殺」ふりと対照的ですからある。「顧維鈞問題」がリットン調査団の入満後も大きな国際問題となっていた

ことから、満鉄系の新聞や日本の新聞はその言動に多くの関心を寄せていたものと思われる。

おわりに

以上、特製アルバムの構成と内容を簡単に紹介してきた。日本において、リットン調査団とその報告書はおもに日本近代史や国際政治史の文脈で数多く論究されてきた。ただ、文中でも指摘したように、満州入国後の顧維鈞の言動、リットン一行の調査のプロセス（例えば、柳条湖事件の現場検証が北京に戻る前日に設定された理由）、一五〇〇通に上る書簡や陳情書が映し出す現地輿論の状況など、今後解明するべき点はまだまだ少なくない。

特製アルバムがリットン報告書やその後の国際聯盟本部での議論にどのような影響を与えたかと言えば、ほとんど影響はなかった、あるいはあったとしても極小であった、との評価は動かないだろう。張学良の暴政を非難し、満洲国樹立の正当性を訴えるという特製アルバムのプロパガンダ的性格を考えれば、それも当然と言える。その意味で、特製アルバムは満洲国の「光」の一面だけ伝えることに徹した、一方的な宣伝材料の一つと見ることができる。特製アルバムの写真や新聞記事を通して、われわれは満鉄（およびその背後にいる満洲国や関東軍）が調査団一行に何を見せようとしたのか、また何を隠蔽しようとしたのかを逐一知ることができる。言い換えれば、写真という視覚資料をひとつひとつ丁寧に分析することで、今日のわれわれは「満洲国」の「実在」と「虚妄」の両面を、臨場感をもって感じることができるのである。その意味で特製アルバムの価値は決して小さくはない。アルバムを通して、あるい

はアルバムを手がかりに、満州事変、リットン調査団派遣、日本の国際連盟脱退という、一九三〇年代前半東アジアの趨勢を決定づけた大きな歴史の流れを触知することが可能になる。

この特製アルバムをひとつの歴史資料として見るとき、われわれには意図的であるかを問わず、そこから排除された「不在」の世界を想像する能力が求められる。一つ例を挙げよう。上述したように、リットン調査団の満州訪問に当たっては、さまざまな民衆団体や個人から膨大な数の書簡や陳情書が届けられた。これらの「民の声」を調査団が重視し、満州独立への賛成・反対論を問わず、積極的な聴取を行ったことは特製アルバムも一面的ながら伝えている。しかし、調査団が現地状況を理解し「民の声」へ接近するには、もうひとつ別のルートがあった。それは、在満の欧米宣教師の情報網であり、リットンら聯盟委員が積極的にこれを活用し、多くの宣教師と接触を図ったことは、冒頭に紹介したジュネーブ国際連合図書・文書館が収める、宣教師からの報告書や書簡に見ることができる。⁽¹⁷⁾これらは、特製アルバムを「表」とすれば、調査団の「裏」の活動を示すまたとない資料である。今後はデジタル化されつつあるそうした資料を活用して、満州事件やリットン調査団の研究がさらなる深まりと広がりを獲得してゆくことを期待したい。

特製アルバムは、客人を迎えるためにきれいに清掃された「表」玄関に過ぎない。だが、玄関を入った先にあるものを見るには、避けては通れない入り口ではある。

注

- (1) 原書は未見。URL: https://unog.primo.exlibrisgroup.com/discovery/fulldisplay?docid=alma9940227384002391&context=L&vid=41UNOG_INST:UNOG&lang=en&search_scope=Alma_UNOG&adaptor=Local%20Search%20Engine&tab=alma-unog&query=any+contains+commission%20manchuria
- (2) 楊駿・張生「日内瓦李頓調查団檔案文獻的結構和価値」『安徽史學』二〇一九年第二期、張生「新史學」的宗旨：中國各界致李頓調查団呈文初解」『抗日戰爭史研究』二〇二二年第二期、張生「接待与政治：李頓調查団的中國関内之行」『近代史研究』二〇二二年第三期。張生主編『國聯調查団報告書 李頓調查団檔案文獻集』（南京大學出版社）が二〇一九年より刊行中。
- (3) United Nations Library & Archives Geneva. URL: <https://archives.un Geneva.org/chine-commission-lytton>
- (4) 白井勝美『滿洲国と國際連盟』吉川弘文館、一九九五年、六八―六九頁。滿鉄総務部調査課はリットン調査団の入滿後に「顧維鈞ノ滿洲国入国拒否問題ノ経過」と題する詳細な報告書を作成している（外務省外交史料館、F193191003、アジア歴史資料センター、リファレンスコード：B10074570600）。
- (5) 「滿洲国の顧維鈞入滿拒絶に関する日本側の斡旋調停について」（吉沢外務大臣より在長春田代領事宛、一九三二年四月二二日）、外務省編『日本外交文書 滿洲事変』第二卷第一冊、一九八一年、七三六―七三七頁。
- (6) 「國際聯合會調查団赴東北調查経過 顧維鈞報告書」、中華民國国外交問題研究会編『中日外交史料叢編（五）日本製造偽組織与國聯的制裁侵略』、一九六六年、一六五―一七〇頁。

- (7) 「顧維鈞一行の監視問題に關し実情報告について」(在奉天森島総領事代理より吉沢外務大臣宛、一九三二年五月六日)、前掲外務省編『日本外交文書 滿洲事変』、八二〇頁。
- (8) 中国社会科学院近代史研究所訳『顧維鈞回憶録』第一分冊、中華書局、一九九三年、四一〇―四一二頁。
- (9) 本庄繁『本庄日記』原書房、一九八九年、九九頁。
- (10) 白井前掲書、七六―七八頁。
- (11) ハインリッヒ・シエネー『滿州国』見聞記―リットン調査団同行記(金森誠也訳)講談社学術文庫、二〇〇二年、一一二―一三頁。(原刊は新人物往来社、一九八八年。)
- (12) 「国際連盟調査委員会報告書」(外務省訳)、第六章第三節「滿州住民の意見」、外務省編『日本外交文書(滿洲事変)』別卷、一九八一年、一九五頁。
- (13) 前掲張生「新史学」的宗旨…中国各界致李頓調査団呈文初解、一三二頁。それらの一部は、張生主編『李頓調査団檔案文獻集・関外団体与民衆呈文』(上下、南京大学出版社、二〇一九年)に収められる。
- (14) 赤松裕之編輯兼発行『リットン報告書附属書』「付録乙 会見日誌」、国際連盟協会発行、一九三三年、一八一―三三頁。
- (15) 華京碩「滿洲国時期の関東軍の新聞関与と中国語新聞」、『21世紀東アジア社会学』第6号、二〇一六年六月、一二六―一二八頁。
- (16) 「滿洲国内ニ於ケル本邦側新聞取締關係」(外務省外交史料館、A35-0-10-002 アジア歴史資料センター、リファレンスコード：B02031109700)

(17) 白井勝美も、調査委員が奉天やハルビンの自国領事や布教活動に従事している外国人宣教師から様々な情報を得ていたことを指摘している。白井前掲書、八一―八三頁。

【補記】校正時に金光耀『顧維鈞伝——以公理争強權』（香港中和出版有限公司、二〇二三年）のあることを知った。コロンビア大学蔵の Wellington Koo Papers を活用した顧維鈞の本格的伝記である。リットン調査団にしたがい満洲に入った顧維鈞の動静をめぐり、顧が手を尽くして現地の中国人に接触しようとしたことや訪問先で会うべき人物のリストを調査団に提出したことを指摘しており、本稿の缺を補う。